地歴公民(世界史)

<全体分析>

試験時間 90 分

解答形式

大問単位では、今年は例年と異なり、問題Ⅰが長文の論述式(350字)、問題Ⅱ～Ⅳが語句で答える記述式と短文の論述式(100字程度まで)を併用する問題であった。

分量・難易(前年比較)

分量(減少・やや減少・**変化なし**・やや増加・増加)

難易(易化・**やや易化**・変化なし・やや難化・難化)

出題の特徴や昨年との変更点

問題Ⅰの長文論述では、初めて漫画が引用され、字数はここ2年間続いた450字が350字に減少した。また、指定語句を「すべてを用いる」形式に「下線を引くこと」が加わった。

出題分野については、地域別では例年同様に欧米とアジアが2題ずつ出題されたが、時代別では、戦後史からの出題はなかった。

例年出題されてきた複数の史料を時代順に並べ替えさせる問題は、出題されなかった。

新課程を踏まえた出題

問題Ⅰの漫画を用いた長文論述は、日本史との共通問題で、歴史総合を強く意識した問題である。漫画の登場人物のセリフをヒントとする手法も、様々な題材を用いて考察させる新課程の主旨に合ったものといえる。

その他トピックス

長文の論述式が日本史との共通問題となり、問題Ⅳから問題Ⅰとなった。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	論述式 (長文 350字)	近代中国史	漫画のセリフに「義和団」が出ており、指定語句もすべて基本的事項であるので、教科書を丁寧に学習していれば対応できる。時期的にどこまでを書くか、判断するのが難しいが、世界史的には辛亥革命に至るプロセスをカバーするのが妥当であろう。	標準
II	記述式 論述式	古代ローマ史	ローマ帝国の政治史を、オーソドックスに扱った問題である。語句解答・短文論述ともに標準的なレベルの内容が問われた。	やや易
III	記述式 論述式 客観式	敦煌石窟寺院の歴史	文献資料を引用した敦煌石窟に関するリード文と地図を使い、中国とその周辺地域との関係を問う設問が用意されている。問1は、地図で雲崗と竜門の位置を選ぶもので、唯一の選択問題であった。	やや易
IV	記述式 論述式	中世ヨーロッパ史	文献を引用したリード文を用いて、中世におけるヨーロッパ諸国の動向を問う問題。語句解答・短文論述ともに標準的なレベルの出題である。	標準

※難易度は5段階「難・やや難・標準・やや易・易」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- 名古屋大学の世界史は史料・文献などが用いられることが多いが、内容としては標準的なレベルの設問が大半なので、教科書・用語集などを丁寧に学習していけば対応できる。
- 大問のテーマは、欧米・アジアの地域から出題され、東西交流なども扱われている。欧米地域では、ギリシア・ローマなど古代地中海世界、中世～現代のヨーロッパ史、アメリカ合衆国史、アジア地域では中国史をはじめ、インド・東南アジア史、イスラーム世界、広域の交易活動などが出題されている。また、近年は戦後史も出題されているので、教科書の内容を最後まで手を抜かずに学習しておくことが重要である。
- 難易度としては、一部に難しい設問が出題されることがあるが、全体には、基本的事項を総合的に捉える力が試されている。これは史料・文献を用いた問題でも同様なので、平易な設問を絶対に落とさない確実な学習が必要である。
- 長文論述は、難問もあるが近年は基本的・標準的レベルの出題が多い。扱われるテーマは、歴史的事象の背景・構造・経過やその因果関係などが多いので、日頃から世界史を大きな視点で捉える学習をしていく姿勢が大切である。対策としては、指定語句・グラフ・史料・写真などを使った論述問題の演習が必要となる。具体的には、名古屋大学の過去問だけでなく、同様の形式で出題する他大学の過去問や論述対策の問題集にも取り組むのがよいだろう。また、論述演習にあたっては、学校や予備校での添削指導をうけて、欠点を修正しておきたい。
- 過去問全体をよく研究し、頻出する事項については、記述式の設問であっても 100 字程度までの短い文章で説明できる学力を身につけたい。
- 日本史との共通問題が出題されているので、歴史総合の学習をおろそかにしないように注意したい。
- 世界史探究の教科書には、随所に多くの発問が用意されている。これらの発問をおろそかにせず、1つ1つ丁寧に答えを考察することで、基本事項の理解が深まり、論述力も高められる。